

泉鏡花

高棧敷

全四章

正規表現版
藪野直史注附

「やぶちゃん注：明治四四（一九一三）年六月発行の『新日本』初出で、大正元（一九一三）年十二月文藝書院刊の作品集「南地心中」、及び、大正八年春陽堂刊の「友染集」に収録された。

底本は岩波旧全集（巻十三・一九四一年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（私の鏡花の俳句集のこちらのものは、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を使用させて戴いた。ここに御礼申し上げます。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化した。

段落末に禁欲的にポイント落ちで注を附した。」

一

「もし、其處は突當りではございません、抜けられますよ。」

「參られますか。」

と鳥打を被つた懷手、別に用も無さうな、ぶらぶら歩行で来た青年が振返つた。

春もたけなはと云ふ、一土曜日の日暮前の事。——此は近頃、強力松の裏あたりへ越した、何處か私立學校で一寸何か教へて居る、木崎時松と云ふのが、當なしに大通を西へ入つて、谷町邊の坂下の窪地をぶらついて居たのである。「やぶちゃん注：これは現在の赤坂離宮の

北部の四谷近辺（ゲーグル・マップ・データ）がロケーションと思われる。」

其處等、屋敷町に、處々まだ取拂ひを濟まさない、卵塔場の交つたのを抜けて、がつくりと坂へ沈んだ、下口は、急にわやわやと賑しく、兩側には、下積の荷物を釘を放して振開けた形だが、其でも店が續いて、豆腐屋の喇叭も鳴れば、羅宇屋の湯煙もむらむらと立つ。小兒も驅廻れば犬も走る。

が、少し行くと、最うこはれごはれの長屋ばかり。夕春日の縁臺へ缺けた竈をがったり

と据ゑたのが見える、と隣の軒下には、溝へ渡して附木細工の板流しが張出してある。手桶も、飯櫃もごたごた大掃除の時のやうに、穴だらけの戸障子から遮るものもないくらゐ。露骨に世帯が食出して、其そのまゝべたべたと正札を貼れば、すぐにならぐたの市が榮えよう……「やぶちゃん注…「板流し」板を敷いた洗いのこと。」

其も道理か、——何も各自が嗜このんで、往來端へ勝手を曝したわけではない。此の片側は一帶に裏が見上げるほどの崖で、早下蒨の濃い煙、一面の草の叢、蛇の蜿蜒つた跡らしい茶色の路が空さまに見え隠れで、狗がのそのそと戸惑をしたやうに歩行く。見ても慄然とするばかり、じめじめと濕けて居て、處々に樹の繁つた、此の崖に押被せられて、何時が世にも、長屋々々、其の裏口には日の當る瀬はあるまい。「やぶちゃん注…「草の叢」「草が群がって生えた所」を言う「生え」の当て訓。」

ために家中、戶外へ、戶外へ、と背後から小突かれて、主人は愚か、女房、小兒、其の日稼ぎに迫廻はされて、内に端然として居るのなどは、見たくもない境遇。

屋の棟へ、どろどろと崖の雪崩れた處には、蜜柑の皮、瀬戸物の缺片と一緒に成つて、上の墓地からであらう、卒都婆の挫折れたの、石碑の碎けたのが、赤土まじりに、草の根ねに落掛つて、しよぼしよぼ雨の陰氣さだと、晝も蒼白く燃えさうである。

まだ凄じいのは、流に青苔の生はえた總井戸より、高い處に、崖の腹へ打ツつけた埃溜で。いや、もう、雑多な芥が、ぞろぞろぐしやぐしやして汚い瀧のやうに流れ懸る。

即效散、一粒丸など、古めかしい廣告が、破葛籠に下貼した體に、上へ、上へ、と路地、拔裏の透いた處を貼塞いで、此の膏藥を潜らない新らしい風も通はず。

恚る中にも、勳八等在郷軍人の門札は、頼母しや、町内鎮座の軍神である。

尤も件の名前に並べて、

(じやうぶな草鞋あり。)

と紙切に貼出したは彦左衛門殿。

軒の、其の下に、襪襦半纏を着た、鐵漿斑な中婆さんと、襷掛けの胸を開けて、大な乳をむつと押附けながら嬰兒を抱いた、圓鬚の手柄の汚れたのと、……通懸りの一寸見によくは覚えぬが、最う一人、其も女で、三人。

悟さどつたやうに、晩方の青黒い崖を見て、薄茫乎と立つて居たのが、背後から呼留め

て、……然うした聲を掛けたのである。

いま洪水がひいた跡と云ふではなし、路の真中に、糠味噌桶、炭取が流留まつたわけではなけれど、露顯な、流元、竈の前、何か餘所の臺所でも抜けて行くやうで、斜に渡した溝板を幾つも飛び飛び、とほとほとした足つきで、

「御免……」と、肚の中でつい言ひながら辿つた處。

二

前途にびたりと、可なり大構の門がある。其から左右へ黑板塀を押廻はした……其の塀の角と崖の腹が、犇とつぼまつて薬研の如く、中窪みに向うがゆきつまりに成つて、一ツ身震ひをして、むつくと起つて、ぬいと伸びを打つた状態に、樹の根の土つちを擡げて居るのが網を張つたやうに見える。下を潜つて、崖の腰を、ちよろちよろと水が流れる。

樹の下なれば、早や暗い。

透かして、其處は行止りだ、と思つて引退した其の途端であつた。

「難有う、」

「其の堀際を、ちよろちよろ水について構はずおいでなさいまし。」

と鐵漿斑な笑顔で言いつた。

「しかし、餘所の構内ぢやないのですか。」

「否、貴下、」と、一寸抜衣紋。

「何方へ行らつしやいますの、」……と小兒を胸に揺上げるやうにしながら、少いのが下駄を引摺つて少し出た。

「何處と云つて、……ぶらぶら運動に歩行きます。急ぎはしません、引返したつて可んですよ。」

時が言ふのを聞き聞き、二人で顔を見て、兩方が瞬き交はした。

「え?」

「えい?」

と頷き合ふ。

「でも、行かれますかね。」

此には答へないで、

「大丈夫だね、先生方だもの、何、お前。」と鐵漿斑が若いのに言った。

「然うねえ。」と納得したらしく、白齒が頷いて、も一ツ手を廻して、小兒の背を抱添へる。

「行らつしやいませよ……路なんでさあね、ほ……ほ。」

と又斑。何やら其が意地の悪さうな顔色に見えた。

且つ其の笑方が、妙に嘲ける如く聞えたので、フト氣に成つて猶豫つたのが、妙に引返しては蔑まれるやうに思つて、聊か憤然とした氣構へ。

何を！ で、づかづか。

「氣をつけておいでなさいませよ、路が悪うございますわ。」

「難有う、」

と振返つて鳥打に手を掛けたなり、其の少い優らしいのが、小兒を横に抱直して、襟を合はせたのを見たが、其のまゝ堀について崖下へつツと入つた。

上は樹の間に、草を覗いて、墓石が薄のほうけたやうに、すくすくある、足許は最う暗い。溝の色は眞黒で、上澄のした水が、ちらちらと樹の根を映して流るゝともなく、たゞ揺れる。……其のへりを、畝つて穴のやうな路は、漸ツと人一人、崖と板堀とに、其も袂が擦れ擦れで。

堀の大な破目から、心するともなしに中を覗くと、五輪が見える、手水鉢が見える。

向うに、干からびた藤棚があつて、水は濁つたが、歴とした池がある。境内の存外大い、此も寺院で、其の池の面に、大空の雲がかゝつた。

少し行く、と向うが又突當りに成りさうな、崖がぐるり取巻いた、……よく言ふたとへながら挿鉢の底のやうな處らしい。

直きに、其も抜けられさう。で、別に仔細はない。女同士が囁いたのも、扱は、此方が念を入れたゝめに、一寸答へに淀んだので、實は矢張表向の抜路ではなく、便宜のために、居まはりのものばかり覺えた拔裏などであらうも知れぬ。

氣安く、又懐手のぶらりと成つて、板堀の破目、透穴から、五ツばかり寺の池を數へて

行つたが、一本、樹の大きなを向うへ抜けると、崖が引包んだ、其の突當りのやうな上の、
づゝと立樹の梢を離れた、遙な空に、上町の家の二階があつて、欄干もともに目に附いた。
けれども其は二階ではなかつた。
が、三階四階と云ふほど高い……崖の頂邊から、棧橋の如く、宙へ釣つた平家なのであ
る。

三

勾配も随分峻しい、一なだれの草の中から、足代の如く煤びた柱を、すくすくと組んで
築上げて、崖からはまるで縁の離れた中途で、其の欄干づきの座敷を、樹の上に支へたが、
眞仰向きに成つて見上げるばかり。で、恰も橋の杭、また芝居の舞臺の奈落とか云ふもの
めく。

芝居と云ふにぞ、棧敷を一間、空に張出した形である。

襖の様は奥深く、最う夜の色も迫つたらう、遠く且つ暗く見えぬ。

障子は一枚もなく、明放して、廻り縁の總欄干。

時がイんだ處からは、其の横手が見えて、一方は壁の、其の色も眞暗で、足代めく
橋柱は固より、透いて見える舟底の如き天井も、件の縁も、一體に煤け古びて、欄干の
小間も其方此方ばらばらに抜けて居る。

背後正面は、此なる寺の屋根さへ、下界一片の瓦にして、四谷の半分、赤坂かけて、
何處まで見通しか計り知られぬ。

からりと廣いから、氣の所爲もあらうけれども、なかなか八疊六疊と云ふ座敷でない、
十五疊二十疊、まだあらうとも思はれた。

下から見えるのは、唯其の一室ばかりであつた。いづれ上町通りの門口には、――京が
見える、大阪が見える、と斜めに貸家札を貼つて、雑作がはりに、家相傳の望遠鏡を賣
でもしよう。

が、土蜘蛛の脊と蝦蟇の頭を礎にしたやうな、床下の柱を見ても、十年來の貸家が
知れる。

と時は目を睜つて舌を巻いた。が、ぶらりと歩行いて、其の棧敷の正面へ廻ると、やあ、空屋處か。

丁度其その間に、二抱へもありさうな、何の樹か、春早く葉の茂つたのが、崖の裾、やがて、溝越に行くものゝ手の届きさうな處に、づしりとあつて、すつくと高い。

此の樹の蔓つた枝と、向ひ合つた廻り縁の角の柱と、さしわたしに遮られて、横手からは見えなかつた。うらう。

其の縁の曲角に、夕詠めと云ふ、つれづれ姿で、正面の欄干に凭懸つた、繪の抜出したらしい婦が居た。

東、西、夕日、宵月の景色を視める風情ではない。

此方へ、雪のやうな襟脚と、すらりとした艶やかな鬢を向けた、すねた柳の坐りやう。

風にも堪へまい、細りした瀧縞の、お召縮緬であらう、黒縹子の襟と其の長い襟をすつきりと水際立てたは、濃い浅葱、あとで心着くと、遠目だのに、——其の半襟の無地だつたのも不思議ほど判然見みえた。

髪も浅葱の手絡を捲いて、三ツ輪と云ふ、婀娜に媚かしい結方して、紺地に白で獨鈷の入つた、博多らしい丸帯を、浅葱絞りの背負上げはづれに、がツくりと弛く結んだ。結目は小間の横木に隠れたが、上についた袖が颯と雲に沈んだやうに空へ掛つて、うしろへ反らして脛をついた、八ツ口深き緋縮緬は、居坐居の裾にも散つて、黄昏かゝる崖の上も、ほんのり明るく、薄紫の霞を彩る。「やぶちゃん注：「手絡」日本髪を結う際に髻に巻きつけるなどして飾る布のことをいう。色には特に縛りがあったわけではないが、無地の藤色や浅葱色などの落ち着いた色は比較的年配の婦人がよく使つたものである。「八ツ口」女性の和服の脇の空き部分のことを指す。「八つ口」の由来は着物全体の空き口が八ヶ所あることからとも、袖付けの下を左右に分けてできる口なので、「八」の字の分かれる形からとされる。」

時は茫然とした。

空なる婦も、暫時、身動きもしないで、熟として、部屋の向むかひの、突當りの黒ずんだ廣い壁を見て居たのである。

ちらりと白い爪尖で、紅の袂を、崩るゝ如く、横坐りに、もう一息、欄干に撓ふばかり、たをやかな其の脊を凭たす、と思はず、青年が、板扉に殆ど魂の抜けた身體を寄掛からせた時であつた。

横手の縁側を前後に、二人、二三尺間を置いて、又是は……羽先の黒い白鳩が、ひらと木隠れに梢を潜るやうに來たのは、對の白衣に墨染の腰法衣を裾短かく着た、剃たてらしい、頭をあをあをと藍色して眞圓な、色の白い、揃つて目鼻立の愛くるしい、いづれも年紀は十三四。

四

お小僧らしい其の二人が、摺足かと思ふ恭しい運びで廊下を渡つて……今正面へ來きたのを見ると、二人とも紙を折つて、ぴたりと口蓋を掛けて居た。

で、いづれ飲料か何ぞであらう、兩方が、齊しく小さな器を手に捧げて居て、唯見るとやがて、婦の前へ順に並べて、つゝと腰衣を黒ろく、姿を白く、板を、這つて一様に跪いた。

其の時、何か差心得たものであらう、二人とも、ちよろちよると立つて、欄干へ出て、手を支いて、半身中空へ乗出すやうな形で此方を瞰下ろす。白衣の下に薄紅の颯と透過つて見えたのは、婦の間近に成つたため、其の長襦袢が照映えて、二人の膚に染みたやうであつたが、よく見ると羅に襲ねたので、お小僧達は、目許口許、見紛ふ方なき女の童なのである。

不審さに、渠は水を浴びたやうにひやりとして、背後を見ると、凭懸つた板塀の節穴に、背後なる寺院の其の境内の池が、黄昏の色に染み出したやうに急に大さも廣さも増して、ふわりと浮いて、ひたひたと水が背中を浸しさうに見えて、而して波を立て、緋鯉がすらと行く。

其の影、燐火のやうに凄かつた。

頭の上でごうごうと沈んだ陰氣な音がする。

「樵夫だ。」

と、聲を出して呟いた。

婦に見惚れて、恍惚と成つて忘れて居たらう、崖に近い、其の大樹の末高い處で、鋸を使ふ氣勢である。

枝さし繁りたれば、葉隠れて鳥の踞つた影も見えぬが、ごうごうごうごうとして幹の骨髓に響く。

と心着けば、向うの欄干の角の柱に生えた、やどり木の枝のやうな梢の一處、特に縁を籠めて暗い中に、風のない日だったが、ざわざわとそよいで、かつらを捲く體に、木の葉の渦卷くのがありありと認められる。……

「これは。」

羽織の襟、帯を掛けて、袖の皺にもばらばらと、少しづつ、少しづつ、霜が下りたやうに木屑が落溜つて居たのである。且つ其の色が生々として朱い。

時は、慌しく、總身に震揺をくれて、袂をはたはたと拂ひながら、樹の下を摺抜けた。雨も鎗も厭はぬが、暮に及んで、恚う鋸を使ふ處では、見込んだ仕事、半途で止すまい。一息と云ふ仕上げで、今にも梁のやうな大枝が、地響を打つて落つるは一定。

「疾く出よう、何だか可訝しい。」

其でも、餘りの事の、媚かしく美しいのに、骨筋もなへるばかり、蕩々と成つて、彷徨ひながら、突當りへついで曲ると、思の外谷は浅い。

向うは低い處、又墓場で、上に、町へ出るならだら坂の、ぼきぼきと埒を結つたのが橋のやうに斜めに渡つて、寂寞したが人家も見える。

此處を取廻はした崖は、裙が其の墓場で盡きる。谷の出口が懷を廣く、箕の形に開いて居た。

墓場と崖の裙を境の處に、潰した井戸のあとと思ふばかりの水溜があつて、其が浸むか、一面にじとじとと、底光がするかと土が濡れた。上には四方から樹が被さる。

渠が傳つて來た小流は、幽ながら、下から湧くか、崖を絞つて滴るか、此の水溜の、浸出す水の捌口らしい。

其處に朦朧として一人、大川端に暮残つた狀して、頬被した漢が居た。手足は動くが、潮に揺れる杭を打つた形である。

半股引の裾端折りした脚に近く、水溜のへりに、やがて腰の上まで届く、網を蓋した大形の古い畚。繪にした狸の八畳敷ばかりなのを引着けて、竹棹を横へたのを、釣の歸途が洗足するか、と思ふと、違ふ。

手にしたのは一本の熊手。柄短かに片手に取つた、片脇に手頃な一個の箕を抱いた。

箕をひたと草に着けて、腰の骨で附着けながら、件の熊手で、崖の腹を逆さ扱きに、ずらずらと搔落して、其の箕でうけて、溜ると、熊手をさし置いて、両手で取つて俯向けにして、下の畚の口へあけ落す時、さつと云ふ……滅入つた、沈んだ、冥途を吹く風のやうな音がして、心持冷々として生腥い。

落葉搔くの、奮びくは可怪。

一寸見る間に、同じ事を三度した。

其の差置く時、熊手は崖の草へしよぼりと沈んだ形に成る、……すつと柄を取つて、ちよつかいの手つきで搔く。ト最う箕が小脇に引着けられる。かさかさ引落す、直に溜るか、畚の口へ、ざあ、とあける。トさつと云ふ可厭な音。

仕事を急ぐのではない。向返るのも大儀らしく、だらけて、もそりで行るが、馴れ切つたものらしい。何時も同一呼吸で、器械の如くに體が動く……恰も緩かな水車に仕掛けた機關の案山子のやうな。

山田小田、目めも遙かな、里遠い山の峽に、影唯一つ秋の暮れ行く思ひがする。

「親仁さん。」

と背後に寄つて、渠は訊ねた……言を交へて、あはよくば聞きたい事があつたのである、——此の界限のものと見た。

「お精が出ますね。」

「うい。」

と頬被りの深い裏に、惰けた、面倒くさうな聲を出したばかり。

熊手を取つて、さらさらと草を扱く。

「何をして居なさるんだね。」

「掘出すだよ。」

と又一搔。

近間で聞くと、是さへ可忌はしい、鱗に觸るやうな草摺れの齒の音なり。

「掘るんですか、何をね。」

「毎日の食を求漁るだよ。」

「知れた事を、と投げた言語。」

「食べるものなんですか。」

「賣りもするだ。……」

「松露ぢやなし、一體何です。」

「問はんが可え、聞いたら魂消るぞ。」

と箕にうけるのが、ぞろぞろと鳴る。

時は、そんな事はついたりで、構はぬのである。

「然う言はれる、と尙ほ聞きたいね、親仁さん。」

「何だてえ。」

「其處の崖の上にある……」

と言ふことも身を轉じて、指ささうとしたが、美女の姿は木隠れに成つて居た。

虹の消えたやうな心地がしながら、

「あの、家は、……あれは何です。」

「たゞで貸かす、名代の空屋だ、誰も住まねえ。」

「違ふよ、人ひとが住んで居ます。」

「や、」

と云ふと、箕をさつとあげた處、――ぐるりと向直つて、屹と見た、其の眼の凄さ。

何心なく立つたのが、思はずじりじりと後に退つた。

「主あ！ 見たか？」

聲が出だなんだ。

「……………」

「む、其を見たら、是も見せう。」

と水溜に搔踞ひ狀、握拳で丁と壓へて、奮を、ぐらぐらと揺ると思へ。

網を分けて、むらむらと煙のやうにのたくつたは、幾百條とも數知れぬ、細い蛇の

鎌首であつた。

呼吸がつまつて、崖へ取つて投られた如くに突當ると、弓形に身體と、ともに反曲つて、

舊來た塀際へ驅出した。

徑こみちを塞ふさいで、眞赤まっかな雲くも。恰あたかも瀧たきの如ごとにかゝるは木屑きくづで。早鐘はやがねを撞つく耳みみの底そこを扶たすつて、
ごうごうごうごうと云いふ。

木の葉はは空そらにぐるぐると大渦おほうづに渦卷うづまいた。

「わつ、」

と叫さけぶと、頭かしらから目口めくちへ浴あびつと、めくら突つきに、其その谷たにの窪くぼみを飛出とびだす。と、木樵きこりが
落おちたか、枝えだが下おりたか、背後うしろに凄すさまじい音おとがした。

今いまは癒いえたが、其その後ご、しばらく目めを悩なやんだ。其そのあと目ひを經へて消きえたが、木屑きくづを浴あ
びた羽織はおりの其處そこ此處こゝ、宛然さながら血ちに染しみて居みたのであつた。